

**【研究ノート】 『感性学』序説**

～人間性に根ざした授業構造へのアプローチ～

平嶋 一臣

**Introduction of KANSEI Study**

～Approach of lesson structure humanity～

by

Kazuomi HIRASHIMA

**キーワード： 感性 感性学 感性哲学 美学 シラバス 脳生理学****はじめに**

21 世紀に入り、ますます自然科学分野の研究が注目をあびている。このような中、社会科学とりわけ「哲学」「感性学」<sup>(1)</sup>は過去のものとして、不要な時代に入ったのであろうか。私はそうは思わない。なぜなら、我々は常に時代を越えて、人間性に根ざした真理探究、つまり「人間による人間のための、絶え間ない幸せを追求する」という根本命題を避けて通ることはできないからだ。

では、「人間の幸せ」とは何であろう。ここに「美」を「哲学」することの意義がある<sup>(2)</sup>。

ヒトは皆「醜」よりも「美」を好む。カントは、既に 200 年前人間性喪失の時代の訪れを予見しており、「感性（美学）」研究の重要性に気付いていた。彼の著『判断力批判』には、「美」をヒトが感官で直感的に掴む「感性」、それを概念カテゴリーの中で思考し捉える「悟性（知性）」、さらに、現象の概念を関連づけ統合力へと発展させ、「理性」として初めて認識できる、とある<sup>(3)</sup>。つまり、「感性」および「感性学」の充実には、ヒトが実感を通し学ぶ必要があると説いているのだ。これを今、純真学園大学の新講座『純真学』の目指すもの、から眺めてみよう。そこには、人間教育の柱の一つとして、「感性豊かな人間性」とあり、学生自らの実践と、本物に学ぶ実感・体験の重視が謳われている。私は、ここに、カント流・「感性の学び」方が息づいており、今後「師」「士」の付く職業人にとって不可欠な、人材育成の基盤としての位置づけがあると捉えている。人間性の回復・伸長が今後ますます重要視されていく中、「感性（学）」の意義は誠に大きいものがある。

本研究ノート『感性学・序説』は、これまでに私が担当した、「人間学」・「純真学入門」「社会人セミナー」・「国語表現法」・「教育方法」・「哲学」（高校専攻科）等の授業を通して得た、学生の「気付き」を整理・分類したものである。私は、ここで多くの学生から「美」や「感性」を意識した直感的で率直な気付きに驚かされることになる。これらの「気付き」を、さらに統合・体系化し、『感性学』授業としていつの日か独立させることができないものだろうか、日々模索している私の姿でもある。

---

受理日：平成 28 年 10 月 31 日

純真短期大学こども学科 特任教授

## 1 「感性」に関するシラバスの先行研究

私はこれまでに、「感性」「感性教育」について、学会をはじめ各種講演会で持論を訴えてきた<sup>(4)</sup>。そして、これを集大成しいつの日か新講座として立ち上げたいと考えてきた。そこで、早速「感性（学）」シラバスに関する先行研究をあたってみた。すると、そこには私の考えているもの、もしくは関連のありそうなシラバスが在った。次に挙げるのは、私がこれまでに知り得た限りの、講座名・授業シラバスおよび指導者の授業内容である。

### ①早稲田大学「感性の哲学」(担当:小林信之・本郷均ほか)シラバス<sup>(5)</sup>

第1回 ガイダンス 第2回 研究領域の概要 第3回 知覚することについて

第4回 視覚の構造 第5回 視覚文化論 第6回 絵画と現実

第7回 「闇と沈黙の国」

第8回 聴覚文化論1 (聴くこと／サウンドスケープ／声)

第9回 聴覚文化論2 (耳を澄ますことの意味／サウンドスケープ論／日本文化の音風景—水琴窟ほか)

第10回 触覚文化論1 (坂部恵「ふれることの哲学」ほか)

第11回 触覚文化論2 (触覚の造形／現代美術と皮膚)

第12回 感情論 第13回 現代の問題 第14回 全体のまとめ1

第15回 全体のまとめ2

ここで、小林・本郷は、知覚や感覚や感情に関わる哲学的テーマを導入的に紹介するものとして、「感性」を捉えている。つまり見、聞き、触れることによって、我々は周りの世界に触れることを基盤に置き、視覚や聴覚や痛みなど身体的次元から、感情や気分や情緒などの精神的次元にいたるまで、広範な感性の働きを理論的に考察することを目指している。

この授業の基本には、哲学的な議論が中心でありながらも、抽象的な思弁におちいることは避け、現代アートなどのスライドや映像を交え、できるだけ具体的な表現を通じて考えぬく姿勢が現れている。

### ②早稲田大学「複合文化論系演習（衣食住の感性研究）」(担当:伊野 連)シラバス<sup>(6)</sup>

第1回 イントロダクション 衣食住の感性とは

第2回 食について 「食」の構造と食品産業のグローバルな管理

第3回 学生発表 第4回 食について2 持続可能な世界の食料需給

第5回 学生発表 第6回 これまでのまとめ 第7回 食について3 食とくらしの人権

第8回 学生発表 第9回 食について4 持続可能な消費と消費者運動

第10回 学生発表 第11回 これまでのまとめ 第12回 衣について モードの感性哲学

第13回 住について 建築を作る文化的な枠組み 第14回 全体のまとめ

第15回 教場レポート作成・提出

ここで、伊野は「衣食住は人間の文化的生存の最も根本的な基盤と捉え、衣食住の思想と再検証を問題視できる授業を計画している。中でも、「食」は我々人間の生存の第一要素として、今後の持続可能社会の考察をメインにしている。

### ③ 早稲田大学「現代美学の射程」(担当：伊野 連) シラバス<sup>(7)</sup>

- 第1回 「現代美学の射程」をめぐって——「現代」における「美学」とは何か——
- 第2回 モダンとポストモダン——マルセル・デュシャン『泉』——
- 第3回 「中心の喪失」と「新しい神話」——F・シュレーゲルと近代ドイツ文化——
- 第4回 西洋音楽史再考——ドイツ音楽中心主義 vs. イタリア・オペラ至上主義——
- 第5回 映像作品における音楽の意義——映画『アマデウス』考察——
- 第6回 ゲスト講義 (その1)
- 第7回 芸術における愛と死——中世英雄叙事詩と楽劇『トリスタンとイゾルデ』——
- 第8回 廃墟の美学・序説——美学と感性論——
- 第9回 「醜」の美学——美学的価値と倫理的価値——
- 第10回 フェティシズムと芸術——有用性を越えた物神性——
- 第11回 ゲスト講義 (その2)
- 第12回 三島由紀夫、ギリシャ悲劇、任侠映画——悲劇の本質と倫理的葛藤——
- 第13回 オリジナルとコピー——W・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』——
- 第14回 身体性と美——舞踊、スポーツ、名演奏——
- 第15回 試験：授業時間内にレポート1課題を執筆して提出

ここで、伊野は現代美学上の難題とも言われる「まったくのオリジナルは存在するのか」と問題提起を行いつつ、「模倣」「コピー」をキーワードに置き、美術・音楽・文学・スポーツと多面的なアプローチを授業に採り入れている。

### ④ 九州大学大学院「感性哲学」(担当：小田部胤久) シラバス<sup>(8)</sup>

- 第1回 哲学における感性 第2回 古代ギリシャ (プラトン)
- 第3回 古代ギリシャ (アリストテレス) 第4回 近世ヨーロッパ (デカルト)
- 第5回 近世ヨーロッパ (スピノザ) 第6回 近世ヨーロッパ (ライプニッツ)
- 第7・8回 近代ヨーロッパ (カント) 第9回 近代ヨーロッパ (フィフテ)
- 第10回 近代ヨーロッパ (シェリング) 第11回 近代ヨーロッパ (ヘーゲル)
- 第12回 近代ヨーロッパ (フィードラー) 第13回 思考と感性
- 第14回 哲学と美 第15回 まとめ

ここで、小田部は「感性」を議論してきた古代から近代までの哲学の歴史を振り返り、「感性とは何か」を問うている。特にカントの純粋理性批判の中の言葉3種についての理解をその柱にしている。

以上が、現時点で私が知り得た限りの「感性」「感性哲学」に関する授業開講シラバスである。いずれも「美学」「感性」を、哲学的視点から考察研究しておられる。これに対して、私の場合は、毎回の授業の中にできるだけ感覚を通して、脳性理学で言うところの辺縁系を中心にした、脳全体（最下層感覚である「筋感覚」をも）を揺さぶり、その実感を繰り返し気付かせることに主眼があり、いきなり参加型中心の学習にならざるを得ない点が違っている。

## 2 私の考える「感性」「感性教育」「感性哲学(美学)」

## (1)「感性」について

「感性」とは何か。これまでの私の研究過程（ヒントメモを含む）を、時系列に沿って記述する。

- ①感性とは人間の持つ感覚の一つまたは総合により、外界からの刺激を感じる自分を客観的に気付くこと。また、そのプロセスにおいて、感情が「発展的」「健康的」「美的」に高まり、それが、自己に生産的発展的価値をもたらすもの・・・2009年3月
- ②感性とは、ヒトの持つ最下層感覚・下層感覚・中層感覚さらに上層感覚の充実を図り、その総合力により、外界をより確かに感じ取る自分に気付くこと・・・2013年6月
- ③「感性がある」とは、人間が心のアンテナを張りめぐらすことができている状態をいう・・・2014年3月23日
- ④感性とは、アンテナを張るための基盤ができていること・・・2014年3月23日
- ⑤感性とは、ヒトの最下層感覚（筋力及び脊髄反射）・下層感覚（脳幹）・中層感覚（古皮質）・上層感覚（新皮質）の充実と総合力による外界への確かな気付き・・・2014年5月
- ⑥感性とは感ずる知性であり、さまざまな行動の源泉に感性が位置している・・・2014年7月24日
- ⑦感性とは「気付く知性」（N. I・・・Notice Intelligence）または（S. I・・・Suspect Intelligence）とも言える・・・2014年7月25日
- ⑧感性とは、ヒトの最下層感覚（筋力及び脊髄反射）・下層感覚（脳幹）・中層感覚（古皮質）・上層感覚（新皮質）の積み重ねの総合力による外界への確かな気付き・・・2014年9月1日
- ⑨からだ作りとは神経も心理・生理学的にも考えてかかること  
一例として、暑さ寒さをエアコンで調節しすぎると、やがて自律神経の未発達なまま大人へ向かう。また、脳生理学的にも、10歳までの体感がその後の感性づくりの基盤になるため、小さい頃から体感させることの大切さを忘れてはならない。  
この頃までの体性感覚野への刺激を絶やさない・・・味覚・視覚・聴覚・泥の感覚・触覚・空気を感じる・風の流れを感じる・四季の変化を五感で掴み取る・痛覚・嗅覚刺激も忘れない・・・2014年9月14日
- ⑩ナマの文化体験（音楽・劇・作品・朗読・表現活動）で、ホンモノ感性を育てることが急務・・・2014年9月14日
- ⑪「感性」とは、周りのことが善的に**気になる**こと、自分のこと自分以外の人・もの・ことに気づき、新たな行動を起こすエネルギーの基となるもの・・・2014年10月1日  
以上のような経過をたどり、現在私は「感性」を、次のように定義づけている。
- ⑫感性とは、ヒトが最下層感覚（筋力及び脊髄反射神経を含む）・下層感覚（脳幹）・中層感覚（古皮質）・上層感覚（新皮質）を（可能な限りビルディング型に近づくよう）積み重ね、その総合力により、外界を確かに気付こうとする動態をいう・・・2014年12月

⑬「感性」とは、ヒトの持つ最下層感覚・下層感覚・中層感覚さらに上層感覚を段階的に充実させ、その総合力により、外界をより確かに感じ取る自分に気付くこと

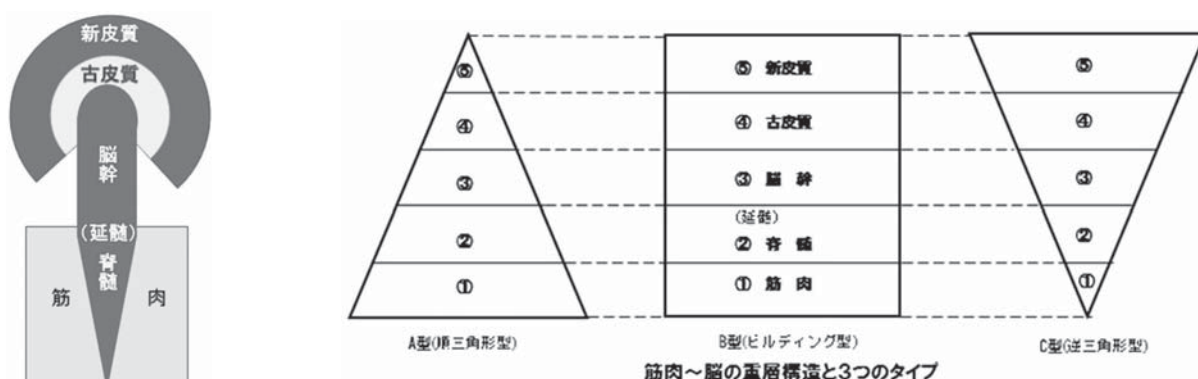
また、これをさらに凝縮し簡潔に説明せよ、と問われれば、

「感性」とは「気付き」である

と答えたい。

このように、私が「感性」についてこれまでに考えてきたことは、年々揺れ動きながらも少しずつ焦点化してきているつもりだ。ここに至るには、2013年頃から考え始めた「脳性理学的な角度からのアプローチ」が支えになっている。つまり、私にとっての「感性」の定義づけの根拠には、脳生理学的見地との融合がある。

今、上記②③④⑤⑩⑬を、より具体的に、次の図版で説明する。



### 脳の重層的構造

(時実利彦著『脳と人間』より一部を平嶋が加筆)

人間の脳は、上左図のように何層もの構造になっている。私はこれを右のB型（ビルディング型）のように、下層から盤石なものに積み上げていけば、最も人間らしい姿が生まれると考える。と同時に、「感性」もまた充実した体験の積み重ねにより、そのヒトの行動・言動が「最も人間らしい」姿として、表出されるものと考え。つまり、「感性」が豊かであればあるほど、「ヒト」から「人」へと成長し、「人」（他人）のことが自分のことのように気になる「人間」となる。すなわち、これこそが周囲に「気付く」人間と言える。

己にたくましく、人（他人）に優しい人間は、「感性」が豊かだ。上の図で示すC型（逆三角形型）やA型（順三角形型）が、多数を占めるようになれば、ヒトだけでなく、国家もまた危機的状態となる。

我々人間の脳は、上図のように「筋肉」がその底辺に大きな支えとして存在していることを忘れてはならない。すなわち、この部位の成長が低下あるいはストップしてしまえば、人間的な成長つまり「感性」の成長は、根底から揺らぐ<sup>(9)</sup>。

### （２）「感性教育」について

文科省は、現行の「幼稚園教育要領」第2章「ねらい及び内容」中の「表現」の項で、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と言い、中学校美術科の指導要領では、「見る・感じる・表現することを繰り返し体験することにより感性は育つ」と言っている。私はこれを完ぺきに積み重ねていくことができれば、前述したビルディング型人間へとつながっていくと考



えている。

児童期・青年期にとって、絶え間ない日々の授業カリキュラムの中に、できるだけ多くの、そして広い視野に立った感覚刺激を織り込んでいくべきである。そのことが、今後児童生徒たちに、多くのそして多面的な経験となり人間的な成長を促す。指導者（教師）は、その基盤として存在する筋肉づくり（筋感覚育て）を常に意識し、これを含む脳の下層階からの積み上げで、安定した自分づくり（脳育て）をサポートしていかななくてはならない。

### （３）「感性哲学（美学）」について

本研究ノート「表題」を見てもお分かりのように、私は日本語の感性は英訳できないと考えており、やむなく英訳を「KANSEI」としている。それは、我々日本人が「感性」という語を使用する時の語感、米英語で言うところの“sensitivity”（「センス」）では完訳できない、わが国独特の感覚やニュアンスが内包されていると考えるからである<sup>（10）</sup>。

また、我々はよく「感性」と「理性」「知性」を対立あるいは並立したものと捉えて説明しがちである。はたして、「感性」と「理性」は対立的または並立的なものであろうか。私はそうは思わない。むしろ重層的なものと考えるべきである。

つまり、「感性」の上層部（位）に、「理性」や「知性」が位置していると考える。それは、冒頭部に述べたように、「感性」「感性教育」の研究は、究極的には、「人間によるあらゆる人間のための幸せ追求」という命題を背負っているからであり、また「人間の幸せ」を求め、感性を「哲学」することの意義がある。

「感性」を学ぶことと「理性」「知性」を学ぶこととを対立・並立的に捉えていては、「感性」無きままの「理性」「知性」が出現しかねないとも限らず、偽物の「知性」が横行し、危険極まりない「知性」でさえ生まれる可能性がある。

本研究ノートでは、「感性」を学ぶ過程には、その抱擁的視野の中に「哲学的視点」「哲学的思考法」「哲学的思考力」という三方位からのアプローチが欠かせない、と言うことに留める。

## 3 授業実践の経過（過去の学生のレポートを中心に）

これまでの授業実践の中から、学生が「感性」を、確かに学んでいると考える部分を、毎回提出のレポートの中から採り上げる（いずれも一部の学生）。

### （１）「感性」とは

学生に「感性」という言葉そのものをどう解釈しているのかを尋ねた。（一般的に）この言葉を漠然と使用しているような気がするので、ここで学生の「感性」に対するイメージをいくらかでも明確にしておきたい。

○「感性」とは、その人が今まで生きてきた中で育んできた考え方や感じ方など直感の感情と思う。だから、生きていく中でその人の感性はどんどん変化していく。つまり感性には正解は無い。鋭いとか鈍いとか言う人も、その人はそう考えても、他の人からすれば反対に感じているかもしれない（A子）

○私が考える感性とは、人間の情動だと思います。人間は考えることで何かしらの感情が生まれます。その感情を行動に移すことで人間らしさが生まれてきます。悲しい場面での涙、祝福の場面でのうれし涙、これは感性の豊かさを表しています（B子）

○私の考える「感性」は、産まれてから現在まで人から受けた刺激と自分の価値観の交わりで生まれる直感的感情のことだと思います。人が成長するにつれ、全く同じ場面に出会っても、捉え方が変わることもあるのではないかと思います。ふしぎな目に見えないものです（C子）

○感性とは、自分の生まれ持ったセンスのことだと思います。人間の感情で感じ、物や人などを自分自身の中で、「これだ」と確定することだと思います。私が犬をかわいいと思っても、他人には違う見方もあるでしょう。しかし、ここで発見した違いこそ個人の持っている「感性」なのです。感性を伸ばすには、他者の視点になり物事を捉えることが良いと思います（D子）

○私が思う感性とは、人それぞれが違うものを持っている感じ方の違いだと思う。言葉で「感性が優れている」とか「感性が良い」などと言うが、それもまた評価する人の感性である。「感性が鈍い」という人は存在しない。それは「感性が鈍い」のではなく、私とは違う感性を持っていると考え、それを受け入れるべきです。そうすることで自分の感性が広がっていくと思う（E子）

## (2)「感性の無さ」の現れ方について

「感性が豊か」「感性が鋭い」「良い感性」「素敵な感性」など、感性はプラス面の印象が強い。では、「悪い感性」というのはあるのか、学生に考えさせた。すると、多くの学生が「感性の無さ」だったら、具体的な事例を挙げられそうだと言う。授業の冒頭に当たり、「感性とは何だろう？」について、考えを揺さぶるにはこれも一つの手立てではないかと考え、グループ討議でその具体例を挙げさせた。学生の気付きには次のような場面が挙がった。

○人の気持ちを考えず、相手の傷つくような発言をする

○喜怒哀楽が乏しい

○障がいのある人に対して差別的な発言をする

○美しい景色を見ても何も感じない。

○人間に関心がない

○掲示物などで人の顔や体があって、そこに平気で画鋏を刺している

○電車の中で、きつそうな人がいても気付かない

○静かにしないといけない場面なのに静かにできない

○相談をしても「あ、そう」だけで終わる

○人の考えに何でも合わせる

○自分を客観視できない

○感動的な場面に出会っても泣かない

○何でも自己中心的

○何でも周りと合わせる

○イジめる、イジメに気付かない、イジメに無関心

○音楽や絵を見ても何も感じない

○「嫌」と言っているのに、笑いながら続けてくる

### (3)他者の「俳句」「短歌」を批評する

新聞紙上で発表された、過去3年間の10月作品より、俳句10句短歌10首を選び<sup>(11)</sup>、学生に一つを選ばせ自由に批評をさせた。「批評は、善し悪しを語るのではなく、作者の背景に在るものを自由に想像し、あなたのこれまでの経験などを思い出しつつ融合した世界を創っていくこと」と伝えた。

○この方は孫と離れて暮らしており、敬老の日にプレゼントをもらうより、孫が「ただいま、遊びに来たよ!」と元気な声で来てくれることが何より嬉しく思っています。いつまでも孫の顔を見られるわけではないので、この一瞬々々を喜んでいます(F子)

○夏に咲く向日葵は、いつも太陽の方を向き、花を広げ大きく咲いているが、台風が来れば強い風に打たれて下を向くこともある。人間も同じで、時には辛く逃げ出したい時もある。しかし、人間だってこの向日葵に負けない強さを持っている。辛い時こそ人は強く生きることができるのです(G子)

○見渡す限りに田んぼが広がっています。夕日に照らされた田んぼに、赤トンボが自分の眼鏡を自慢しながらポーズをとっています。トンボの視点で俳句をよむことができる、その気が素晴らしい(H子)。

○島根県の冬は冷たい。今年ももうすぐ冬が来る。雪が屋根に積もれば雪下ろしだ。妻には無理な仕事だ。昨年も2時間ほどかかってしまう大雪の日があったなあ。外は薄暗くなりかけていた。雪下ろしを終えて戻ると妻は夕食の準備をしていた。コンコンコンと包丁の音が聞こえていたなあ。冷えた体。こたつの上に置いてあった蜜柑を手にとった。吐く息が白かった(I男)。

○命はあっけなく失われていく。生きていくことは大変なんだということをこの短歌は教えてくれる。カマキリを殺した側(人間)は、もしかしたら殺したことさえ気付いていないかもしれない。カマキリの死は無駄になっている。その体を蟻が生きるために回収する姿を見てカマキリも少しは報われるかもしれない。悲しい死は、あつけない誰の心にも残らない死に方です(J子)

▲以上は、学生の評のほんの一部である。学生は、俳句・短歌の善し悪しよりも、作者自身になりきって、自己を投影していることが分かる。私はこれこそ「作者からボタンを受け継ぎ自分が新たな創作を行う」という本物の批評を見る思いがする。

### (4)感覚協働法の試み

ここでは、単なる名画鑑賞ではなく、一つの絵を見つめながら(視覚)、それと同時に音楽を聞くと(聴覚)、自分にとってこの絵がどんな世界に映るのかを語ってもらうことにした。絵はモジリアーニの「赤ん坊を抱くジプシー女」(このタイトルは伏せておく)、曲Aはハイドンの「ひばり」曲Bはグリーグの「ペールギュント・第2曲」とした。

○曲A・・・新しい命が誕生した。この子と初めての小旅行です。少しの時間もこの子と離れることはできません。今、バス停で次のバスを待っています。ふと、周囲を見渡すと、菜の花が温かい春風に揺れています。これが本当の幸せというのでしょうか。わが子の顔を覗いてみると、いい夢を見ているのでしょうか。笑顔が微笑ましい。



**曲B**・・・こんな世の中がいつまで続くのでしょうか。私は耐えられない。この子が生まれてすぐに夫は戦争へ行ってしまった。やがて夫の戦死を知らせる手紙が届いた。これからのことを考えると不安がつくる。一人でこの子を育てることができるのだろうか。もう一度夫に会いたい（K子）。

○**曲A**・・・母マリーは、朝日が昇る少し前に起きます。着替えを済まし、まだ気持ちよさそうに眠っているトーマスを見て朝食作りに取りかかった。朝食の準備が終わると、もう一度トーマスの部屋を訪れ、静かに抱き寄せた。朝日がゆっくりと顔を出している。今日も気持ちの良い一日になりそうだ。トーマスの顔にも朝の光が当たり始めた。

**曲B**・・・ある大雨の日であった。この家の長男トムが外に遊びに行った。母マリーはなぜかこの日に限って胸騒ぎがしたのだった。胸にゾワゾワとした違和感が残ったのだ。「気を付けて行っておいで・・・」と先ほど見送ったばかり。トムが出て数時間が経った。それまですやすやと眠っていた次男チャーリーが突然泣き始めたのだ。マリーはあやしながらトムの帰りを待っていた。チャーリーが泣きやんだその時、一人の訪問者が・・・トムの死を知らせる訪問者であった。マリーの体から力が抜けていった（L子）。

○**曲A**・・・赤ん坊を抱いた女が、夜、窓際の壁に寄り添って座っている。この女は、今泣いている我が子を寝かしつけようとしているのだ。三人暮らしの家庭は、裕福ではないがそれでも苦勞とは思わない毎日だ。今日も楽しみながら、赤ん坊と夫の帰りを待っている。

**曲B**・・・泣きやまない赤ん坊を抱いて、母親は部屋の片隅に置いてある椅子に座りこんでいる。彼女は長年連れ添ってきた夫が急に亡くなり悲しみにふけていた。「これからどうやって、この子といきていけばいいの？ どうやってこの子を育てて行けば・・・」彼女は、生きる希望を失ってしまった。そんな彼女に腕の中の赤ん坊の声は届かない。大雨の降る空を見上げながら、泣き声の響く部屋で、彼女は生きる希望について考えているのだった（M子）

▲同じ絵であるにも関わらず、学生の反応はかなり違って映っている。この学習で、学生の気付きには次のようなものがあつた（アンダーラインの部分は脳生理学的にも興味深い）。

※初めこの絵を見たときは、色が暗く女性も笑顔がないから、よいイメージは全くなかった。しかし、Aの曲を聴くと、情景が一変しました。なんだか、この女性が笑顔に見えてきました。Bの曲を聴くと、今度は暗く黒っぽい絵に見えてきました。人の脳は、こんなにも変化してしまうことに驚きます。

※曲を変えるだけで、こんなにもイメージが変わることに驚いた。テレビや映画のBGM、サウンドトラックの重要性に気付くことができた。人間はとても不思議だ。

※同じ絵であるにもかかわらず、私には全く違う情景が浮かびました。曲Aの時は、この女性の口元が微笑むように動いて見えました。ところが、曲Bになると、Aのときには気付かなかった、女性には暗い影があるのに気付きました。

※視覚だけの時は、この絵は色が暗くて女性も笑顔でないので良いイメージは全くなか



った。でも、Aの曲を聴くと情景が一変した。女性の顔が笑って見え、Bの曲では初めよりもっと暗く映った。人の脳はこんなにも変化するとは驚きです。

※今回の課題から、私は常に目からの情報を頼りにしていることが分かりました。それは、音楽を変えただけで、一枚の絵からさまざまな物語が生まれたからです。人は一つの情報だけで、事を決めるのではなく多くの情報から判断しているし、それが大事なことだと思います。

※絵に音楽を加えて鑑賞したことがなかったので、新鮮な気持ちになりました。こんなにも私たちは音楽に影響を受けているものなのかと思いました。五感を全て使い何かを感じてみると、もっと楽しいだろうと思います。モジリアーニさんのこの絵に託している本当の気持ちを知りたくなりました。

#### (5)学園のキャンパス風景から、遮二無二自由律俳句を創る

学生は、俳句と言えは5・7・5のリズムで書かなければ、と考えていた。その固定観念を取り去り、自分だけの持つ内在律による「詩感」こそが、俳句の原点である。これを掴んでほしいと考え、学園キャンパスを散策し、五感を伴うことによる自由律俳句（一行詩と言ってもよい）を遮二無二創らせた。事前に、参考作品として、山頭火、放哉、禅寺洞の句を紹介した。五感を伴った句作を勧めた中の一部である。

- 1 人間関係の怖さの中に私も形成されて
- 2 メトロノームのような針を見つめて私の帰路
- 3 分からない哲学思考の中の私は迷い子
- 4 お互いに大人になりたくない会話する友がここに
- 5 独りの寂しさをまぎらわし 一人で遊んでいる
- 6 私の秘密基地が 少しずつ黄昏れていく
- 7 母はやっぱり偉大です 今 気付きます
- 8 「また明日」この言葉が言い合える幸せ
- 9 強い陽ざし ものともしない 汗の匂いの青春
- 10 心のこもった「ありがとう」で広がる人脈
- 11 五限目の授業が長すぎると何度も時計を見る
- 12 山彦と会話したい私がここにいます
- 13 オレンジ色の空を見上げひと息ついている
- 14 直感だけでは気づけない そこに気づいた自分がここに
- 15 試験も実習もない私は十月病
- 16 母の笑みとお天道さんがふかふか
- 17 想いを伝え去った君は秋風
- 18 大学してみたい 友を眺めて考えている私
- 19 水ももらえないままの草花がじっと見つめている
- 20 簡単なはずの一步が怖い自分
- 21 幸せの増大は共有から始まる
- 22 自分の弱さに気づき新しい糧とする

▲この授業の後には、必ず「定型俳句と自由律俳句のどちらが好きですか？」と尋ねることにしている。そこでは、およそ2：1の割合で「定型俳句」を好む傾向が見られた。

ところが、今年度の高校専攻科 41 名に限っては、全くその反対で、およそ 1 : 2 の割合で「自由律俳句」を好む傾向が見られた。これは、過去に無かったことだけに、より詳しくその理由を尋ねてみたいと思った。理由には次のようなものが挙がった。

※素直に感じたままを好きなリズムで作れる

※リズムカルで自分の気持ちがスッと頭に入ってくる

※その時、書いた人の気持ちや体験をストレートに出すことができる。

※文字数を限られると自分の気持ちを素直に表現できないところがある

※この方（自由律俳句）が、型にとらわれずのびのびと作ることができる

※定形では、物事の一点しか訴えることができないが、自由律俳句では物事の本当の思いや、何かを予感させるようなことも表現できるから

※文字数に制限が無く、感情を素直にストレートに表すことができる

※自分のオリジナリティーがそのまま出すことができる

#### （6）音楽の中に見る人間の本音・本性（わらべ歌・子守歌・日本民謡を教材として）

わらべ歌・子守唄・日本民謡のメロディーには、なぜか哀感漂うものが多い。学生は案外その事に気付かないまま歌っているケースも多いのではないかと考え、「島原の子守唄」「五木の子守唄」「博多子守唄」「刈干切り歌」「ひえつき節」など、主に九州の歌を中心に聴かせ、学生自らの感情への気付きを誘った。尚、比較教材としてブラームスとモーツァルトの子守唄を聴かせている。

○日本のわらべ歌にも、悲しい物語が隠されているのもあることを知りました。その曲の作られた時代背景を考えることも大切な事を学びました。「歌詞はごまかせても、メロディーは嘘をつけない」と言った先生の考え方に納得しました（N子）。

○いろいろな県の子守唄を聴いて、歌詞とメロディーのずれがあるのもあることを知りました。普段、保育園で歌っている童謡などもこれからは歌詞にも注目していきます（O子）。

○何気なく聴いたり口ずさんだりしている歌も、実は深い意味があることに驚きました。悲しい物語の子守唄が、どうしてあのように広まっていくのか、不思議です。これからは、歌を聴いたら、歌詞ばかりでなくメロディーに注目していきます（P子）。

○民謡やわらべ歌は、奥が深いと思いました。それに比べ、今どきの歌は歌詞も意味が分かり易いと思います。ちょっと分かりにくい民謡やわらべ歌に興味を持ちました。これからは、ただぼんやりと聞くのではなく、何か意味があるということを頭において聞きたいと思いました（Q子）。

○西洋の子守唄に比べ、日本の子守唄はどこか悲しく美しいと感じました。昔の日本人が、どんな社会背景の中で、どんなにか悲しい思いを持って生活してきたのかを、私たちはもっと知っていく必要があると感じました。私自身、知らない・知らなかった現実があるのだということを思い知った（R子）。

○意味を知り改めて音楽を聴くと、場面が想像できました。意味を知って歌っていくべきだ、と思いました（S子）

○「しゃぼん玉」や「五木の子守唄」などを聞いて、何となく静かで少しくらいなあ、と思っていました。改めて歌詞をちゃんとよんでみると、それが少し分かってきました。「子守唄」にも、色々な種類があることが分かりました（T子）。

▲このように、学生の中には、詩（詞）とメロディーとの間にズレを感じたり、メロディーには作者（ここでは民衆と呼ぶべきであろうか）の本性が出やすい、ということを感じ覚的に捉え始めている。この、一見すると人間世界の矛盾とも考えられる事実を意識しておくことは、自己の感性育ての基盤的な部分となろう。

#### 4 私の考える「感性学」授業のシラバス

##### （１）授業の形式・・・講義＋実践演習

##### （２）単位・時間数・・・90 分×15 回

##### （３）授業の概要

21 世紀は「感性」の時代とも言われている。そこには「人間関係の希薄化」「人権感覚の欠如」そして「自由な発想力の低下」という現状打破を望む声もあるのではなかろうか。生を受けたばかりの「ヒト」が、やがて「人間」へと成長していく中で、最も大切な学びは人間的な感性（学）の享受に基づく自己変革にある。そのためにも、「感性」「感性教育」の研究実践、曖昧なままでは済まされない。では、「感性」とは一体何だろうか。授業では、「感性」の意義、「感性」とみなされ易い場面、「感性」の育て方など、体験型の具体的な授業方法を探りいれながら進めていく。その結果、めいめいが、自分という人間の在り方について明確で主体的な考えを持つことができるはずである。

##### （４）到達目標

- ① 「感性」は、人間のあらゆる思考や行動の源点であることを知り、日頃からその大切さを意識することができる。
- ② 人間関係づくりの根本に関わる自己の感性磨きに努めることができる。
- ③ 「感性学」を学び、日々新たな自己発見・自己啓発を行うとともに、他人・他物との共生について主体的に捉えることができる。

##### （５）授業計画（15 回の授業）

- ①オリエンテーション・「感性」の時代がやってきた（あなたの感性力は）
- ②「感性」についてのさまざまな研究事例を知る（感性哲学の原理）
- ③義務教育期における「感性教育」の実態を知る（感性育ては可能か）
- ④日本の伝統文化や芸能および言語文化（能・狂言・短歌・俳句）に表われた感性について学ぶ
- ⑤絵画の世界に潜む感性を知る（感覚協働法の試み）
- ⑥音楽の世界に潜む感性を知る（民謡・わらべ歌に潜む世界を知る）
- ⑦人間力・コミュニケーション能力と感性との関係を知る（感性とコミュニケーション力との相関）
- ⑧人権感覚と感性育てとの相関を考える（ある古典落語を分析しつつ）
- ⑨幼児期における感性教育の重要性を知る（脳生理学的視点から感性を考える）
- ⑩文学（主に随筆・小説）の中に表れる感性について学ぶ（芥川龍之介の語りについて）
- ⑪国際化・情報化社会における感性の在り方を考える（主に映像・メディア・マスコミの態様について）
- ⑫書の中に見る感性の表われを知る（「書」は人なりと言うが、それはどういうことなのか）
- ⑬スポーツおよび芸術と感性の表われを知る（感性の諸様相）
- ⑭感性（学）の未来を考える（次時の発表に向けて、めいめいがオリジナル格言を創り解説する）
- ⑮まとめ（これまでの学び・私の格言・感性教育の今後、などをテーマに各自発表を行う）

##### （６）教科書・参考書・その他の教材



【教科書】なし

【参考書】平嶋一臣編・著『講義資料』 平嶋一臣共著『感性のひらめき』

【その他】『感性』『感性教育』に関するプリントを毎回配布する

## おわりに

『感性学』への構想は、未だ緒についたばかりの「序説」に過ぎない。この研究ノートで示したように、シラバス作成の基礎資料として最も頼りとしているのは、学生から提出される毎回のレポートである。これらはいずれも、若々しい学生の「感性」に根ざした本音が語られており、まことに貴重なものである。

これらの資料をもとに、今後さらに、学生の「感性豊かな人間」育てに繋がる、実践学的な『感性学』授業の構築に向かって研究を深めていきたい。

## 註

- (1) 五感に訴える授業を行うことで、芸術・道德・倫理をはじめ、人間が自分をより高い位置に発展させることができる学問。また、一般的には、哲学の方法論的形態は、①存在論（形而上学）②認識論（論理学）③実践論（倫理学）④感性論（美学）が挙げられる。
- (2) 「哲学」することの意義は、最終的には人間の幸せを探究する具体的な方法を学ぶことにある。ギリシャの古代哲学者から現代の哲学者まで、その思考の中核は常にここにある。
- (3) 「哲学」「感性学」いずれも、一握りの研究者のためにあるのではない。生を受けた物は等しく、そして常に「哲学」しており、「感性学」を、具体的な方法や領域で行っているのである。
- (4) これまでの私の「感性」に関する発表は次の通り
  - ①「感性を育てる ～その実践と今後の課題～」平成 24 年度日本感性教育学会（慶應義塾幼稚舎）2012・7・15
  - ②「感性を揺さぶる授業の試み～口語自由律俳句を教材として～」平成 25 年度日本感性教育学会（長野県・北アルプス展望美術館）2013・6・30
  - ③「感性教育の在り方についての考察とその具体的な試み～自己の感覚を総合させ、周りの人やモノに気付く取り組みを通して～」第 87 回九州教育経営学会（福岡教育大学教職大学院）2013(H25)・11・2
  - ④『『感性』及び『感性教育』に関する一考察』純真短期大学研究紀要第 54 号 2013(H25) 11・15
  - ⑤「指導者の『感性』認識および『感性教育』の現状と課題」平成 26 年度日本感性教育学会（横浜市・日本丸メモリアルパーク）2014・8・27
  - ⑥「感性教育についての試論的考察①～文科省政策文書および先行研究を中心に～」第 90 回九州教育経営学会（福岡市教育センター）2014・10・4
  - ⑦「教師の『感性教育』認識について」純真短期大学研究紀要第 55 号、2014・12・5
  - ⑧『『感性』を育てる～幼児・児童期の墨書表現による～』純真短期大学研究紀要第 56 号 2015・12・5



- (5) <http://www.fukugo-waseda.jp/syllabus/985/> から引用
- (6) <https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/index.php> から引用
- (7) <https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/index.php> から引用
- (8) <http://rche.kyushu-u.ac.jp/~in-kyotsu/h22/G2106.html> から引用
- (9) 学習の基盤として、筋肉中に存在する「筋紡錘」、人間の意識にのぼらない「筋感覚」を常に意識しておくべきである。
- (10) 日本語で言うところの「感性」をどう英訳するか、かなり難しい問題が横たわっている。感性工学学会では「KANSEI」とそのまま日本語で通しているようだ。私もまた、sensitivity, sensitivity, susceptibility, emotion, feeling では、十分な英訳にはならず、「KANSEI」が妥当だと考える。
- (11) 過去3年間、10月掲載の朝日俳壇・歌壇の中から、平嶋が10句10首を選んだ。

### 参考文献および図書

- アーサー・D・エフランド著、岩崎由起夫訳『美術と知能と感性』日本文教出版、2011年
- 石井義武著『勉強の仕方の研究』岩波ブックセンター信山社、1985年
- 伊藤 肇著『人間学』PHP文庫、1990年
- 岩本真紀著『リスク感性に必要なコンペテンシー要素の明確化』香川県立医療大学雑誌 第5巻 p15-22、2014)
- 遠藤友麗著『感性教育のすすめ』～心と知に働く豊かな感性の育成とその理論～2001年12月号特集
- 小川仁志著『哲学の教室』中経出版、2010年
- 片岡徳雄著『子どもの感性を育む』NHKブックス603、1990年
- 加藤尚武著『現代倫理学入門』講談社学術文庫、2005年
- カント著『判断力批判』岩波書店・カント全集8、1999年
- カント著『純粹理性批判(上)』岩波書店・カント全集4、2001年
- 木原武一著『哲学からのメッセージ』新潮選書、1999年
- 桐田敬介著『感性を働かせながら』日本美術教育学会、2010年
- 倉戸ツギオ著『体験学習と感性教育』明治図書出版、2001年
- 桑子敏雄著『感性の哲学』NHKブックス914、2001年
- 古閑博美著『ホスピタリティとEQ』嘉悦大学研究論集第46巻第2号通巻84号、2004年
- 酒井一郎著『ホリスティック感性教育によるコミュニティビジネス実践論』田園調布学園大学2005年 p69-91
- 坂口光一著『リベラルアーツ講座「感性・こころ」』亜紀書房、2008年
- 佐々木健一著『日本的感性』中公新書2072、2010年
- 都甲 潔・坂口光一編『感性の科学』～心理と技術の融合～朝倉書店、2006年
- 中谷彰宏著『大学時代にしておく50のこと』ダイヤモンド社、1997年
- 樋口聡著『身体教育の思想』勁草書房、2005年